

9



日本
国語
大辞典

ひち～みん

日本國語大辭典

第九卷

編集 日本大辭典刊行会
発行 小学館

日本国語大辞典〔縮刷版〕 第九卷

昭和五十年九月一日 日本国語大辞典 第十七卷発行◎
昭和五十年十一月一日 日本国語大辞典 第十八卷発行◎
昭和五十六年二月二十五日 同 縮刷版第一版第一刷発行◎

編集 日本大辞典刊行会
発行者 相賀徹夫
印刷者 小林清

発行所 株式会社 小 学 館

東京都千代田区一ツ橋二丁目三十一
電話 製作(〇三)二三〇一五三三三
販売(〇三)二三〇一五七三九
〔郵便番号〕一〇一〔振替〕東京八一二〇〇

*造本には注意しておりますが、万一落丁・乱丁
などの不良品の場合は、おとりかえいたします。

Printed in Japan

0581-420009-3068

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、
法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利侵害
となります。あらかじめ小社あて許諾を求めてください。

ひちやげる【動】因納める。しまう。岡山県上房郡宍
ひちやつと【訓】水などが勢よく、音をたててはね
あがるさまを表わす語。〔開園會之図①〕

びちゃり・びちゃ【訓】(多く)を伴って用いる。

水などをしきりにねかえすさま。また、水にひたる
さまを表わす語。『ドリゲス日本大文典』ミヅ
ガビュビヤウ(ビチャビヤウ) スル。鶏・森鷗外
「鞋をびちゃりと言はせて」 ②物事が続けさ
まに起こるさまを表わす語。むしろに。やたら。
●酒落本 愚人養賢流続借金「仕まひはびちゃびちゃ
●形動。水などにくもれるさま。
●温泉宿川端康成来り一「油でびちゃびちゃ
毛を濡らして」。百鬼園隨筆内田百閒 蜻蛉玉切腹
羊羹略路 薄皮の取れた肌は、びちゃびちに濡れて
●開園會之図③は⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ は⑥
●ひちゃり・びちゃ【訓】⑩ 水の流れが浅く少なく、
小さな音をたてて流れるさま。また、水が物にあた
つてはねて、小さな音をたてるさまを表わす語
魚が尾で水をうつ音、水のある所をぞうりなどで踏
んで歩く音、波が舟たたいた音、幼児の水遊びの
さまなど、いろいろな場合にいう。●吾輩は猫である
◎夏目漱石七「汚ない水をばちやびちゃ跳ねか
があるか」。童謡町のそばさん◎高麗潮だ◎とても
強くてびちゃびちゃと田螺拾ひをすること
平手でかるく何度もなく音を表わす語。●吾輩は
猫である◎夏目漱石四「自分で自分の禿頭をびちゃ
びちゃ叩く事や」 ③物を飲み食いするさまなどに
たてる舌の音を表わす語。●太政官上司小剣「五小
さな香氣の塊を一つ口に入れ、歯のない口で、でもくも
くと顔を動かして、びちゃびちゃと舌を鳴らした」
●苦の世界全野浩二四「一「酒をのむ時に、舌を
しまわつてやゝ鳴らすくせがある」
しみわたつていいます。●温泉宿川端康成夏遊記
三「桃割髪が油でびちゃびちゃに濡れたやうに」
●ひちゃり【訓】軽く平手で、びちゃり、舌打ちしたり
する音を表わす語。びちゃり。●酒落本・溫海上産比
チャリヒチャリと舌打し」 〔開園會之図〕

びちゃり【訓】柔らかなものが、湿ったものが、ぶつかつ
たりつづけたのはねあがつたりするさま。また、柔
らかい水っぽいものを、踏みつけたりさわたりする
さまを表わす語。「びちゃりと泥がはねあがつたさ
ま」 ●鳥物語錦木三重吉 雨上りの往來をびちゃりびち
やりと町筋へ出る」 〔開園會之図④〕

びちゃり【訓】(多く)を伴って用いる。 ①水など
が小さな音をたててはねあがるさまを表わす語。
②平手でたたいたり、平たいもので打つ音などを表
わす語。●坑夫夏目漱石「尻もべつたり突いて仕舞
つた。びちゃりと云った」 〔開園會之図⑤〕

びちゃる【動】因捨てる。投げ捨てる。新潟県46

佐渡43相川在⁷⁴ 長野県523 愛知県北設楽郡569 (ひ
ちちゃん) 信濃⁷⁵

ひちちゃん (詞) ①軽い平たい物などが水面に落ちる
音。また、水などが軽くはねあがる音などを表わす
語。②平手でたたく音、ふくらんでいた物がつぶ
れる音、戸などをいきなり閉める音などを表わす語。
※今年竹見登勢⁷⁶ 昼の酒四⁷⁷ ビちゃん⁷⁸と、かう、その
手をひたりた⁷⁹ 酒四⁸⁰ ビちゃん⁸¹ (詞)

ひちちゃん (名) (形動) おしつぶされて平たくなる
さまを表わす語。びしゃんこ。べちちゃんこ。
俗⁸² (詞)

ひちゅう (飛虫) 空中を飛び回る虫。・自然と人
生徳富蘆花⁸³ 湘南雜筆⁸⁴ 新樹⁸⁵ 限りなき飛虫(ヒチュウ)
の雪の如く粉々として。 〔飛虫〕ヒチュウ 俗⁸⁶ (詞)

ひちゅう (秘中) 名) 秘密にしている物事のうち。
〔飛虫〕ヒチュウ (名) 余⁸⁷ (詞)

ひちゅうの秘(ひ)「秘密(ひみつ)」 秘密にして
いるものの中でも、最も秘密な中⁸⁸。非常に大事
な秘密。・二人女房⁸⁹ 尾崎紅葉⁹⁰ 中五⁹¹ これから
は他聞を憚る秘中(ヒチュウの秘密(ヒミツ)) 〔飛
虫〕ヒチュウ(ヒミツ) 余⁹² (詞)

ひちゅう (被中) 名) 夜具の中。ふとんの中。・藤原
惺窩集⁹³ 三次調紹意子⁹⁴ 枕上蚤吟霜⁹⁵ 聲、被中⁹⁶ 鶏唱曙
天声⁹⁷・即興詩人⁹⁸ 森岡外訳⁹⁹ 歌女¹⁰⁰ 我は手を被中¹⁰¹ へ
伸べて拍ち鳴らした¹⁰²

ひちゅう (詔裏) 名) 自分の心をへりくだしている
語。微裏¹⁰³・新聞雜誌¹⁰⁴ 二分の心をへりくだしている
詔裏(ヒチュウ)を御側察被¹⁰⁵ 為¹⁰⁶ 在¹⁰⁷・新聞雜誌¹⁰⁸ 三四
号¹⁰⁹ 明治五年三月¹¹⁰ 敢て詔裏を吐露する所以也¹¹¹

ひちゅう (尾星) 名) ①吸虫類の第一中間宿主内に
おける幼生名。②原素動物、尾星類の総称。オタ
マジャクシのような形をしていて、海中を終生浮游
生活をする。 〔飛虫〕ヒチュウ 俗¹¹² (詞)

ひちゅう [美中] 名) 美のなか。美しい物事のなか。
〔飛虫〕ヒチュウ 俗¹¹³ (詞)

ひちゅう (刺) 名) 美しい花にとげがあるよ
うに、美しいからといって油断してはいけないこ
とをいう。・青年森岡外¹¹⁴ 四美中に刺ありともい
ふべき批評の詞を浴せ掛けるとは¹¹⁵

ひちゅう [微忠] 名) へりくたつていう語。・源平盛衰
を尽くしたことを、へりくたつていう語。・源平盛衰
記¹¹⁶ 十四時忠卿罪科¹¹⁷ 此れ命を扶けむと為とも雖も、
又、微忠(ヒチュウ)にあらぬや¹¹⁸・近世紀聞¹¹⁹ 余崎延房¹²⁰
三¹²¹「微忠(ヒチュウ)のことは殿下にも能く知らし召
れつらん」 〔飛虫〕ヒチュウ 俗¹²² (詞)

ひちゅう [微裏] 名) 自分の本心、まごころをへりく
だていう語。微意¹²³。微衷¹²⁴。御採用¹²⁵ 幸¹²⁶ 願¹²⁷。一
号¹²⁸ 明治四年七月¹²⁹ 区々々々¹³⁰ 微衷、御採用¹³¹ 幸¹³² 願¹³³。
口入道¹³⁴ 高山樗牛¹³⁵ 三三¹³⁶ 故内府が御恩の万分の¹³⁷ 淹
々へん滝口が微衷¹³⁸ 〔飛虫〕ヒチュウ 俗¹³⁹ (詞) 余¹⁴⁰

ひちゅう〔鼻中〕「名」鼻の中。鼻の内部。・善喉（ぜんこう）八之界錦之裏（うしろ）後叙述（さへ）は眼中西施を出し、悟れば鼻中臭気（びじうちゅうくいき）をいだしす。（尾形丈草子）

ひちやう〔鼻柱〕「名」「はなばしら」（鼻柱）に同じ。

ひちやうビチュー（口）余乙

ひちやう〔鼻紐〕「名」把手（てと）として。つまみ。また、印鑑や鏡などで穴をうがった紐を通すように作ったつまみ。・航米日録四「横一面に板を釘す。其板に鼻紐を設け、而して其房中に入出す。」・鞍馬緑巻三〇「印章制度、千石六百石、四百石至二百石以上、皆刻印鼻紐、文曰「印」」

ひちやう〔備中〕「びっちゅう」（備中）に同じ。・色葉字類抄「備中、ヒチウ」。（同前）書影、伊勢、繪頭

ひちやうか〔鼻腔〕「名」鼻腔の中央にあるきりぎりすの管。・鼻腔（びぢやう）

ピチューメン（名）（bitumen）天然に産する炭化水素類。またはそれらの非金属誘導体などの混合物の総称。原油、アスファルト、石灰の類。瀝青（れきせい）にせよ。

ひちやつ〔罷黜〕「名」官職をやめさせ、退けること。・横井平四郎宛吉田松陰書簡「嘉永六年一月二六日」「就中上には屢々政府に登り、又屢々罷黜せられし也」とある。・「忠告」に「登り」とあり、食事もなしで居ることをいふ意である。

ひちよし〔七好〕「名」七好といふことは、食事・顔氏家訓風操「箕帚（みそう）疍（たづね）唾吐（つきた）、執酹沃盥（しやくろうわかん）、皆有節度」。・「七好」を失う。食事中持っていた箸とはしをとをえ取り落す。非常に驚くさまをいう。・劉志先主伝「曹公從容謂先主曰、今天下英雄、惟使君与操耳、本初之徒、不足数也、先主方食、失匕箸」。

ひちより〔日帳〕「名」その日の事を記した帳簿。日記帳。・浮世草子「好色一代男」目録「語分の日帳、新町木の村屋和務事」、随筆多波礼「草一」いづれの国にも日帳（ヒチャウ）日記などいひひらいておもしろいく事あり」。

ひちよう〔飛鳥〕「名」飛鳥。空を飛び鳥。・雲集三月三日侍宴會陽殿奉和「飛鳥帝幸遇」、和漢朗詠上落花（暮春ゆふべ）には飛鳥に随つて一時にふる「白居易」・花鏡無声爲恨「飛鳥の風にしがたがふよそはひなるべし」を舞とし云、「易経小過卦「飛鳥遺之音不宣上、宜下」」。

余乙（口）國語文明

ひちよう〔蔵〕（口）余乙「蔵（かくる）」

「蔵おさう」みて良弓（りょうきゆう）「蔵（かくる）」
春秋夫差内伝などに見えるたとえ。捕えるべき鳥がいなくなると弓は仕舞われてしまう。敵国を滅ぼすのに功があった謀臣も用がある時はないもののように思われて捨てられる。用のある間は使われ用がなくなると捨てられたたとえ。狡項（かうかう）（こう）と死して走狗烹（そうこほう）にらる。・歌舞伎辰月夜

見聞実記往柄の平太一序幕飛鳥良きて良弓隠るる世のたとえ。歌舞伎も稽源氏雪白旗中幕口「狡兎死して走狗衰なり」飛鳥良良良成りぬるの喻の如く、史記趙王勾踐世家蜚鳥良良良蔵、狡兎死走狗衰。

ひちやうの 翔かけり 飛鳥が空を翔(かけ)るといふ動作の手はずをときき、攻め戦はば、浄瑠璃木朝鳥鳥翔りの手を時きき、

ひちやう 懐(ぶとこ)に入(はい)る時(とき)は狩人(かりゅうど)もこれを捕(とら)えず 困窮した者が助けを求めてやって来た時には、これを手助けてやると人が情であるといふたとえ。 野鳥(きょうわ)はあやうゆゑの懐に人は獵師も殺さず、浄瑠璃(じやうろうり)は来誕生会(らいだんしんかい)時は狩人は狩人をとらぬとは、情を知れとの世のしめし

ひちやう テウ飛超(トウヒチョウ) 飛びこえること。花柳春話織田一向一郎記三「鞭を加へ馬を躍らし之を飛越ヒテウす」、左思呉都賦「猿蹏探然、騰騰飛超」 飛超(トウヒチョウ) 飛超(トウヒチョウ)

ひちやう テフ飛蝶(トウヒチョウ) 飛んでいる蝶。作文大体「飛蝶上花心に」日簡辞書「トウヒチョウ」トブチョウ」 飛心(トウヒチョウ) 飛心(トウヒチョウ)

ひちやう テン帖帖(トウヒチョウ) 秘密のことを書くための手帳。また、秘密のことを記録した帳面。 飛心(トウヒチョウ) 飛心(トウヒチョウ)

ひちやう テウ悲調(トウヒチョウ) 悲しげな調子。悲しい音調。・性霊集一〇・故贈僧正勅操大徳影讃男女角舎発心・華野志念会歌・職官調之感也。・小春・岡本田独歩二今やそれの幽音悲調に耳を傾けたり・宇朝小吟芳雄二有情が彼の真率で切実な秀歌の独特な悲調をなしているものである。・謝雲連山居賦「憶哀園之悲調慨俗倫之美」 飛心(トウヒチョウ) 飛心(トウヒチョウ)

ひちやう テウ美鳥(トウヒチョウ) 美しい鳥。西京繁昌記増山守臣初下「インコウと唱る鳥あり」。略略めて美鳥にし。 飛心(トウヒチョウ) 飛心(トウヒチョウ)

ひちやう まん ヒチャウ(肥腸筋)ニうしろ足のうしろ側の最表層にある筋。ヒチャウにはきざり、足を曲げる働きをする。 飛心(トウヒチョウ) 飛心(トウヒチョウ)

ひちやう きんけん いれん ヒチウキン(膀胱癌)一名膀胱筋に起こる有痛性の癌腫。静脈の鬱滞、過労、循環障害などによって起る。こむらがえり。 飛心(トウヒチョウ) 飛心(トウヒチョウ)

ひちやう うせい テウサウ(微調整)一名テレビで、チャンネルを含めた後、画像を最も見やすい状態に整えること。転じて、一般にわずかに調整することにもいう。 飛心(トウヒチョウ) 飛心(トウヒチョウ)

ひちやう ぼし(七曜星) 因幡北斗七星、長野県諏訪郡静岡間552(ひたちそ)伊豆八丈島中之郷39

粥亮、粥膳、粥匡、粥成、粥導、粥正台の次官。す

【筆】①ふで。刀筆、筆硯、筆紙、筆墨、鉛筆、

骨筆、鉄筆、毛筆、硬筆、朱筆、万年筆、執筆、下筆、呵

筆、潤筆、染筆、擲筆、投筆、弄筆、運筆、用筆、筆管、

筆洗、筆鋒、②ふでで書く。また書かれたもの。筆

舌、筆削、筆記、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、筆算、

ひつを駐とどむ 天子の行幸や貴人の他行で途

中にとどまる。左思呉郡賦、明節頓轡、齊轡

駐留。

ひつ【筆】二十八宿の一つ。西方に位するもの。おう

座のエンシロン星付近の星宿をいう。畢宿ひつし

ゆ、あめまへぼし。中興五、乾象廿八宿略

筆、畢、參の七宿。その並びやう虎の形の如し。

【國語】畢、ひつ【字音】畢

ひつ【漢】自タ四、自タ上、他下二、ひつず、漢

ひつ【他】タ下二、ひつず、漢

ひつ【俳諧】太極の逆、皮ひつと、ひつと、ひつと、

ひつ【俗】好色、ひつこいこと。しづか。酒落

本風俗砂伝、今夜の客は新ごさのくせに大のひつ

さ。

ひつ【を】動く。好色な行為をする。酒落本、寸南破

良意、新ごさ、はからし、よしねへへ略、といはれ

て、ひつをひつをはたらく。

ひつ【あつ】筆、ひつ。文字を書くときに筆やペンな

どに加わる、押える力。【國語】ひつ

ひつ【筆】筆、ひつ。文字を書くときに筆やペンな

どに加わる、押える力。【國語】ひつ

ひつ【筆】筆、ひつ。文字を書くときに筆やペンな

どに加わる、押える力。【國語】ひつ

ひつ【筆】筆、ひつ。文字を書くときに筆やペンな

どに加わる、押える力。【國語】ひつ

ひつ【筆】筆、ひつ。文字を書くときに筆やペンな

どに加わる、押える力。【國語】ひつ

ひつ【筆】筆、ひつ。文字を書くときに筆やペンな

どに加わる、押える力。【國語】ひつ

ひつ【筆】筆、ひつ。文字を書くときに筆やペンな

どに加わる、押える力。【國語】ひつ

ひつ【筆】筆、ひつ。文字を書くときに筆やペンな

どに加わる、押える力。【國語】ひつ

ひつ【筆】筆、ひつ。文字を書くときに筆やペンな

どに加わる、押える力。【國語】ひつ

ひつ【筆】筆、ひつ。文字を書くときに筆やペンな

どに加わる、押える力。【國語】ひつ

ひつ【筆】筆、ひつ。文字を書くときに筆やペンな

どに加わる、押える力。【國語】ひつ

ひつ【筆】筆、ひつ。文字を書くときに筆やペンな

どに加わる、押える力。【國語】ひつ

ひつ【筆】筆、ひつ。文字を書くときに筆やペンな

どに加わる、押える力。【國語】ひつ

ひつ、或はこれを嫌忌すれども。花柳春話、織田純一

郎、即付録二、今フロレンスを失て悲憤（ヒツ）に

耐す。史記、淮南王安、百姓悲憤、相思欲、為乱

者、十家而已。【國語】ヒツ、ひつ【字音】ヒツ

ひつ【おや】【概観】「名」江戸時代、浅草観音の境内で楊

枝や茶屋を商った店のうち、特に、古くから営業し

いた主た店をいう。古くは、一軒の店を張らず、

境内に小長櫃などを置き、その上に品物などを並べ

て売ったところからの称。役店、俗事百工起源、

浅草楊枝店始原、随筆、守貞漫稿二、四「江戸浅草

首堂より山門の間の間、茶店、茶店、茶店、茶店、

中に十餘店、概観、或云役店」と云あり。略、当堂

追離の鬼に扮する者、今も概観を役す。

ひつ【か】【筆】筆、ひつ。文字を書くときに筆やペンな

どに加わる、押える力。【國語】ひつ

ひつ【か】【筆】筆、ひつ。文字を書くときに筆やペンな

どに加わる、押える力。【國語】ひつ

ひつ【か】【筆】筆、ひつ。文字を書くときに筆やペンな

どに加わる、押える力。【國語】ひつ

ひつ【か】【筆】筆、ひつ。文字を書くときに筆やペンな

どに加わる、押える力。【國語】ひつ

ひつ【か】【筆】筆、ひつ。文字を書くときに筆やペンな

どに加わる、押える力。【國語】ひつ

ひつ【か】【筆】筆、ひつ。文字を書くときに筆やペンな

どに加わる、押える力。【國語】ひつ

ひつ【か】【筆】筆、ひつ。文字を書くときに筆やペンな

どに加わる、押える力。【國語】ひつ

ひつ【か】【筆】筆、ひつ。文字を書くときに筆やペンな

どに加わる、押える力。【國語】ひつ

ひつ【か】【筆】筆、ひつ。文字を書くときに筆やペンな

どに加わる、押える力。【國語】ひつ

ひつ【か】【筆】筆、ひつ。文字を書くときに筆やペンな

どに加わる、押える力。【國語】ひつ

ひつ【か】【筆】筆、ひつ。文字を書くときに筆やペンな

どに加わる、押える力。【國語】ひつ

ひつ【か】【筆】筆、ひつ。文字を書くときに筆やペンな

どに加わる、押える力。【國語】ひつ

ひつ【か】【筆】筆、ひつ。文字を書くときに筆やペンな

どに加わる、押える力。【國語】ひつ

ひつ【か】【筆】筆、ひつ。文字を書くときに筆やペンな

どに加わる、押える力。【國語】ひつ

ひつ【か】【筆】筆、ひつ。文字を書くときに筆やペンな

どに加わる、押える力。【國語】ひつ

試験、頭弁、玉石、石、山、阿、序、篇、分、涇渭、於、筆

海、之、岸、と、楊、柳、原、州、百、泉、泉、李、君、神、道、師、文、場、筆

海、招、柳、等、於、辰、辰、并、南、論、議、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、錫、

けてゐた智め」・「麦田山花袋二三日日那さへ
をひつかけて、本当に張つたことをしたが、^⑨着
物などを釘などの出っ張つたものにかけ、破り裂
け、かき裂きをつくる。^⑩車などで人や物をひく
ては飛飛ばす。^⑪逮捕する、拘縛する意の、盗人仲
間の隠語。「隠語構成様式并其語集」・「陶園金」シカ
ゲル・フカゲル・洋軽語彙集」・「繪つ切」余之^⑫「ひつかか
る」・「繪つ切」余之^⑬「ひつかか
ひつかかぬ」余之^⑭「ひつかかぬ」余之^⑮
の变化した語。・「咄本」醒睡笑六「ほのぼのと赤根の
小袖ひつかさね島隠れ行くおとしぞ思ふ」
ひつかける。「引」・「ひつかける」は接頭語
押^⑯につける。おさ^⑰ひつかける。・「滑稽本」八笑人四上
「即功紙を張つたさきん玉を見るやうに、ひどくひつか
じめるぜ」

ひっかかじる【引鑿(動)】方言。爪でひっかく。千葉県上
武郡256 伊豆八丈島大賀郷310 静岡県志太郡561 (ひっ
かじく) 栃木県足利214 群馬県桐生235
ひっかずく・くかずく【引被】『他カ四』(ひっかつぐ)

とも) ひきかすく(引被)の變化した語・巨海代抄「上」あの樵夫が破笠短簀ひつかづいて狐峯岩下に飯たは」・多情多恨(尾崎紅葉)後・九・「今は観念した軀で夜衣を引被(ヒツカツ)いだ」

ひつかた名 ①ひたき(鶴) 奈良県66 ②ひたき(鶴) 奈良県66
 ③あかはら(赤鹿) 奈良県添上郡
 ④じょうびたき(尉鶴) 群馬県030 千葉県046 愛媛県046

ひっかたげる〔引担〕「他方下」^一 図ひっかたゝ他方下二（ひは接頭語）勢いよくかつく。かつぎ持つ。また、さうら。ひきかたげる。ひっかつく。

げのくまいか・浄瑠璃 聖徳太子絵伝記「二門のと
びらをひつかったが嶋主がしがいをのせ」**〔発音 ヒツ
カタゲル 〔横〕団〕**

ひゝかたまる(引塊ひきかたまる、自ラ四)ひゝひは接頭語
一か所に寄り集まる。かたまる。*多情多恨ひさかたまる尾崎紅
葉後・八・二垣の隅に三株ばかりの一重山吹が引塊
(ヒツカタマ)つて乱脈に咲散して〔発音標〕

ひつかたむける(「引低」)「他カ下二」区ひつかたむく
 (「他カ下二」)(「ひつ」は接頭語。「ひつかたむける」とも)
 勢よく傾ける。・大洲和尚再吟中「江西海をひつ傾て
 尻居上を水責めにせめて」・咄本・輕口御前

男二七引(ヒ) かなふに吾(のま)おたれに
ひっかつぐ【引担】『他方五四』(「ひっ」は接頭語
①勢いよくかつぐ。荒々しくかつぐ。★浄瑠璃・曾
我会稽山一「母はね返し一放れ、大の男をひっかつ

きとうと落す其響」②うまくなす すっかり
あざむく。・滑稽本・八笑人「初・一日暮里中の人を
すっぱりひつかついだが」③婦女を誘拐(ゆうか

玉に過ぎたる留聲ゆゑ、引掛④、三人吉三廊初賀三穂野に
するかつぐ、歌舞伎・三人吉三廊初賀三穂野
しねえか」④ひっかける(引掛⑤)に同じ。・多
情多恨尾崎紅葉後九・「呷々(ぐびぐびと)嘸
で飲むで、慌忙しく大息を吹いて、又引掛⑤
いだ」(楽団ヒッカップ(會之))
⑤つかと(副) 光るさまをいう。びかつと。・巨海代
抄上「在ると、雷雷の音信時分、壁間ひつかとす
るかと思ふたは、大淵和尙再吟中「其の日光
活爪の程は、芦花家紅の辺にひつかとしたそ
のひかなぐる(「他う四」ひきかなぐる)の変化した
語」・日葡辞書[Fleischmann, U. utta ヲツカナダ
ル]・婦系図(金鏡後三・三引)ひかなぐ
て、其の手巾をはたきと地に撒(なげ)つや否や」
(楽団ヒッカップ(會之))

うかひニカ「語」ひかひかを強めた語。・津増
璃・南蛮鉄後藤目貫「二」りつばな侍が編笠きて京の
方へびつかびつか光る著物をきて」〔発音〕「音」〔方〕
うかぶせる【引被】他サ下「ひきかぶせる（引

被(レ)の变化した語・機軸(横光利一)頭の上から真
鍮板の切片をひつ冠せて(発音論セセ
ひつかぶる【引被】(他ラ五(四))「ひきかぶる(引
被)の変化した語」①(水、夜具、かぶりものなど

を勢いよくかふる。頭からかふる。●史記抄一五・
寶田伝「頭巾をひっかぶりたやうにして入」●浮世草
子・好色一代男一三・五「さあお寝やれと申、こころえ
たと南かしらにひっかぶり」②責任などを自分で

負う、引き受ける。●照本・眞の子・餅・屈・女郎・ふいと
 の仕ぞこない、若い者ひつかぶり「旦那御免」〔発音〕
〔書クマ〕 余ア、〔口〕
 つかまう：かまふ【引構】『他ハ下二』（「ひっ」は接

頭詰」とつしりとかまえる。・史記抄一三・酈陸好要害にひつかまへて居るを云ぞ。・報恩録下「うしろにひつかまえて押藏してをくを云也」

取る。「なかなかひつかまえた人だ」山形県米沢17②
独占する。岩手県気仙郡133
ひつからう《動》**①**「**②**背に負う。『袋をひつからう』長
崎県南高来郡92《ひつからう》熊本県下益城郡949

ひっかるゝ 大分県 95
ひっから・げる 【引絡】他方下二 因 ひっから・ぐ 他
方下二 (ひっ) は接頭語 ① 全体を残らずまとめる
。残らずひっくるめる。・浮世草子・本朝桜陰比
古・五人・衣ひくくる。ひくくす。ひくくす。ひくくす。

事・五・②家内ひびからけて身代百目かものはなかり
 瑠璃・心中宵庚申・上・裾七の図迄引からげ・滑稽
 本・七偏人・三・下・「尻引(ヒツ)からげ腕捲(まく)り」

●売花簪 斎藤耕雨「雨にも風にも裾弓裏（ヒツカ）
けてへ略」挽みなく働けば」〔方言〕着物のすそをはし
よる。香川県817 熊本県下益城郡949 〔発音〕ヒツカラ

ツル、**櫛**のまづ。
グール、**櫛**のまづ。
語）強くからまる。〔引緒〕「白ラ五四」(ひつ)は接頭
が複様に入り組む、こんがらかる。・行人、夏目漱石の
兄二七、事が斯んな風に引緒(ヒツカウ)まつた日に
是レ**〔附〕**
①ツルからむ〔引緒〕「白マ五四」(ひつ)は接頭語
②強くからむ。ぎざつとからまる。**③**いらいろ
とこしみに。複様で面倒になる。・歌舞(カラエ)
江戸粧三立、何とか、むぶかしく引つ揃(カラエ)
来た。・滑槽本、浮世風呂四上、双方にも引(ヒツ)
からん幾はねえら。**〔附〕**
ツル、**櫛**のまづ。
語）詐欺賭博(とばく)の一種をいう。詐欺
師仲間(しやうけん)の隠語。(特殊語百科辞典)
ツル、**櫛**のまづ。
語）(多く)とを伴って用いる。光のひら

めき輝くさまを表わす語。●天理本狂言：神鳴くわ
らぐわら、ぐわらぐわら、ひっかりひっかりと云て出
て。●俳諧：玉海集付句：下・雑「ひっかりとせしうた
て」のこはいろとどろなる神かときけばうすひきて（全）

吟) 方言〔名〕斜視、やぶにらみ。岩手県奥仙道(33) 仙台15 福島市174 山梨県南都留郡山中033 (びっかり) 仙台16 古辞書書

物の多いさまで、たくさん、福島県東白川郡棚倉17千
葉県香取郡東部050 静岡県田方郡557
っかり『副』（多くとを伴って用いる）一瞬に鋭
く、または、一つだけ目立って、光り輝いているさま

五「さしもの守屋眼ぐらみ、へ略」見かへれば又びつかり」・にごりえへ樋口一葉五「情は吉野紙の薄物に、螢の光びっかりとする斗」〔発音〕標之口

・章謡：依はごろごろ／＼野口雨情「お星さまびっかり
このお空でびっかり」

計を發明し、膨大な数の恒星の光度を測定、国際基準をつくった。一九一七年「ヘンリーードレーパー分光型星表を公刊」。(二八四六―一九一九) **【発遣】** 倫敦

つがわ^ニかは^ニ柳川^ニ 京都市東山区山科の北東部に
發し、東山の東側を流れて音羽川を合わせ、伏見区で
宇治川に合する山科川の旧称。〔発音〕ヒツツ 会々〇〇
かん^ニクワン^ニ〔筆管〕〔名〕筆の軸。筆柄（ふでづ

つゝかん〔筆翰〕《名》筆。また、文字・文章を書くこと。●本朝高僧伝二・三、京兆南禪寺沙門一寧伝、寧又

善筆翰，持二林片，需書者，常盈門限。」（《往徠集》）
四・義之「揚摧百世，孰若晉衰，独有筆翰，風流足
師」。（《晉書·陶侃傳》）「遠近書疏，莫不手答，筆翰如

流木〔筆記〕
ひつき〔筆記〕
ひつき〔名〕①書きしるすこと。書きとること。また、その記したものを。記事。・書言字考節用集
九筆記〔名〕・隨筆〔隨筆〕隨筆記序 先師幾庵之閑
際筆記者〔名〕花柳奇書綾田閑一郎記す日に幾庵の書
を筆記するを以て楽みとなせり。・思出の記 徳富蘆花
三三・二 其裁判筆記の出た新聞。・南齊書〔文字〕
丘巨源伝 筆記踐後 非穀話所待 閒曲小説 非否
判所記 ②ひつきちやう〔筆記體〕の略。・思出
の記 徳富蘆花 二 〇一・二 何ぞや唯(た)た 三年の
課程を踏むて 幾間の筆記を拵て 〔南齊書〕のシツ
キ 靜園 愈々 〇 余之 〔南齊書〕
ひつき〔日〕〔名〕①太歳と月。・常陸風土記 瑠波
〔愛〕はつきかも我が子孫(こ) 高きかも神宮か
むむや 天地の共(むた)た 日月(ひつき)の共 〔万

葉十二(四四八六二)天地を照らす日月(ひつぎ)の極
(きはみ)無くあるべきものを何をか思はむ(淳仁天
皇)。②日数月数。時日。*万葉二・一六七「朝こと
に御言問はさず日月(ひつぎ)の数多(まねく)な

りぬれ「柿本人麻呂」・万葉二・〇〇二さかたの
天知らしめる君故に日月(ひつき)も知らず恋ひ渡る
かも「柿本人麻呂」〔発音〕 柿ノヒ 〔古語〕 書云
ひつき【火付】『名』火のつきぐあい。・百鬼園隨筆

へ田百閒・白鹿園先生言行余録・三火つきの悪い吸
 殻を」〔発音論より余の〕
 つき」〔名〕方言樹木、たいみんたちはな（大明橘）。
 徳島県海部郡赤河内802（ふつぎ）鹿児島県甑島974

ひつき【斗】ひつきほし(斗宿)に同じ。
ひつき【棺・柩】(名)(古くは「ひつき」)死体を入れて葬る箱。かん。かんおけ。・書紀「景行四三年北野本訓」(群臣等「まぢきむ

たは因（よ）りて以て
其（そ）の棺（ひつ）ツキを
開（ひら）きて視（み）れば」
・栄花・楚王の夢「さてひ



上人絵伝

つぎに入れ奉りて蓋かた
めなどし奉る程は思やる
べし」・大慈恩寺三藏法
師伝嘉応二年点一「五棺
棺」

(ヒツキ) 已に揃ひ。 詰詞
(1) ヒツキの転。ヒツキは
キトキの転箋注和名抄。ヒツキ(人木)の転。人の
入る木の意。日本釈名。但言集覽名言通。和訓栞。語

「ヒトギ」の転「大言海」。(2)ヒトギ(人城)の義キはオクツキ(奥城)のキに同じ(俗語考)。(3)ヒトギ(人器)の義「言元梯」。(4)ヒトケ(人司)の転(日本古語大辞典)松岡静雄。〔発音ヒツギ 今ま〕ヒトギ(鳥

取〕（徳）⑩ 余子⑩ （古） 諱 遺色 華・名義・和玉・文明・伊奈・書高
ひつぎを蓋（おお）うて知る 死んで棺にふたをし
てからはじめてその人の真価がわかる。・当世書



棺 〈注然上人餘伝〉

[illegible]

に当たるに」・文芸類聚「柳原芳野編」七「当時の韓人にて、帰化せし軍工なるへし」・蘇軾「見愈俊筆時筆工近歲說」呉愈「李葛庵名総不へし」②「文草書画などの作者」筆者・浮世草子「元禄六年記」五十三「軍工（ヒッコウ）は当時の名人牧村伊六に筆垢をとりせ」〔関西ヒッコウ 巻②〕

ひっこう〔筆工〕一名「習字に熟達すること。また、その人」。異制庭訓往来「若筆功畢者唐様可有稽古也」・文明本節用集「筆功ヒッコウ」〔関西ヒッコウ 巻②〕〔西国文明叢書〕

ひっこう〔カウ筆研〕一名「写字によって報酬を受けること。また、その人」・文筆で生活することいふ。・新撰朗歌下「速懷「筆研」疲れて未だ獲（から）ず。秋の風塵宙の畦（うね）に葬れぬ（高階積喜）」・俳諧俳諧「字般若（か）本にあらぬもどく筆研をして写本おびたし板のめたり」・思出の記「徳富盛花七十四「十行二十語一枚五厘の筆研を周旋して呉れたのは」・任防「為蕨揚州薦士表「既筆研為養又備書成学」」〔関西ヒッコウ 巻②〕余①②〔西国文明叢書〕

ひっこうかき ヒッカカ「〔筆研〕を（カ）筆研をする人」・高橋阿伝夜役「譯名（名）垣魯文三下「備書生ヒッカウカキも又二名に托し」」〔関西ヒッコウカキ 巻②〕

ひっこうけんてん ヒツケン「〔耕田図〕一名（筆で硯（すずり）の田を耕す意）」・文筆で生活を立ていくことと。〔関西ヒッコウケンテン 巻②〕

ひっこうせん ヒッカカ「〔筆研〕を（カ）戦国時代、下級武士たちの乱暴や悪行などを避けるため、寺社や有力な旧家などが武將に差し出した金銭。金銭を受け取った武將は、制札を立て、部下の乱暴行為を禁止した。制札銭。

ひっこかかす「〔引転（他サ四）「ひきこかす（引転）」の变化した語。〔関西會々④〕

ひっこがす「〔勳〕因①破換する。こわす。佐賀県唐津96「長崎県彼作42②「ひき抜く。鹿児島県973ひっこき（引抜き）「ひっこきがみ（引抜き）の略」

・浮世草子「好色産毛四二「白き只はせ引き」」・ききに髪結う」・落本「遊子方言「髪結がとんだやばだ。どうぞもう五分程「根をあけて、はげさきを、すつとひっこき」」

おひこ。福島県東白川郡棚倉174「長野県諏訪525②へこ帯。岩手県泉仙郡22 福島県若松松 高知県884ひっこきがみ「〔引抜き髪（二名）梳す〕いた髪（ひん）や髪（つ）とを出さずに、ひきつめて結う髪型。引抜き髪。引抜髪（わけ）。ひきこきがみ。・淨瑠璃世経曾我風流の舞（ひっこきがみの髪なし）ひきつて物を思へとや」・浮世草子「御前義経記五二二「ひっこき髪（つ）となし」

ひっこきしまた「〔引抜き島田（二名）髪（ひん）髪（つ）とを出さないで、ひきつめて結った島田髷。・浮世草子「好色貝合下「つとなし（ひっこき島田シマダ）」

・浮世草子五箇の津奈情男二・「中京はひっこき
 島田はかはしりしが」
 ひっこきと「引拔堀」名 髪びん 髪を出さない
 こと。ひっこきに髪をたねること。・浄瑠璃 兎源氏
 道中軍記四引こき堀(ツト)
 ひっこきまわる ；はる「引放回」[自ラ四] あらこ
 とかけ回るさまをいやしめていう語。・浄瑠璃 聖徳
 太子絵伝記三いくさだてしてひっこき廻るつらに
 くらく。
 ひっこきわけ「引拔堀」名「ひっこきがみ引拔
 髪」に同じ。・随筆 守貞漫稿(一)京坂にて髪髻を
 出さざるを都(すて)ひっこき桶と云
 ひっこく(勳)「引」打つ。長野県石頭郡532
 まして物を取る。茨城県那珂郡201
 ひっこさげる「他方下」奪い取る。取り上げる。
 ひつたくる。・機屋島伝治三泣いたり、おがんだ
 りするに、無理や引こさげて来んだらね
 因(ひ)こさく山口県阿武郡66「ひこさげる愛
 媛県松山832「ひこ」なぐる。香川県高松650
 ひっこし「引越」名「1」居所を移えること。・転移。
 転居。転宅。・雑俳 柳多留初「引越の跡から帰猫を
 抱き」・化銀杏 泉鏡花三「またお転宅(ヒッ)コシは
 大抵ぢやあるまいから」2「ひっこしふなばり
 引越船乗」の略。・新造注文控之事 神楽八儀助様
 分「一、三百反引こし 杉五尋巻本」 〔采女金巻スツ
 コシ〕富山県 〔巻之〕 〔余之〕
 ひっこし「名」(「しりこ」尻尾)の変化した。胸
 こしのさらに変化したの。押し通す勇氣、度胸
 根気。・歌舞伎 玉藻前御園公服四立など、ひっ
 こしのねえ。・歌舞伎 敵討 鳴古市(正直清兵衛)序
 幕「ええひっこしのねえ震動めが」 〔采女金巻スツ
 ひっこし〕形々。もひっこし
 ひっこし「形々」いはい「引越祝」名「引越」を祝う
 こと。また、そのために贈る金品。・赤痢 石川啄木
 「『移転祝ヒッコシハ』の積りで、重兵衛が酒を五
 合買つて来た」 〔采女金巻スツ〕
 ひっこしくるま(引越車)名「引越荷物運搬する
 車。・田舎教師 山田花袋五〇「荷物を満載した三台
 の引越車は」 〔采女金巻スツ〕
 ひっこしこし「雪中海老太広鉄腸」下八「御引越先を捜し
 て居りました」 〔采女金巻スツ〕 〔余之〕
 ひっこしそは「引越蕎麦」名(「おそばに参りました
 る」に意をかけて)引越してきた近隣に近づいた
 るしに配る蕎麦。・随筆 皇都千年三「中引越蕎麦
 へ略宿替引越しの節上りの宿茶とて附木を配る事な
 く江戸は悪く蕎麦を配る事なり」・歌舞伎 勧善懲惡 惡
 孝子替二幕引越し蕎麦の切手で済ませ」 〔采女金巻
 スツ〕 〔余之〕
 ひっこししていし「引越亭主」名「披露もしないで、

妻に在る女性のものと来る。歌舞伎・独逸舞五三駄四幕「わしはこれから小吉田で、駕籠も一挺運ばれて、直ぐに江戸へ引越し亭主・滑稽本統・膝栗毛」初「引越女房といふはあるが、そんならおぬめへはひっこし亭主だから珍らしい。」
〔笑〕ヒッコシ・儂之
デメシヨ

ひっこしにもつた〔引越荷物〕一名「引越しの際、転居告出に運びこむ家財道具など。」〔笑〕儂之
ひっこしにようほう。ニ・スウ引越女房一名「結婚するときに、あたかも他の土地で披露などをすませそれから引越して来たようにして、新所帯を持つて嫁に女房まで、嫁入りの荷物の同時に一緒に嫁。歌舞伎・貞操花鳥羽恋塚六立武家の作法を打替えて、依に申せば引越女房・滑稽本統・膝栗毛」初世間には引越女房ヒッコシニウバウといふはあるが、歌舞伎八幡外望月眼縮屋新助一四幕返し夜船これより木更律へ引越女房に連れて行かろうでござい。

〔笑〕ヒッコシ・ボー儂之
ひっこしふなばり「引越船艀引越船張」近世の大型和船の艀とも側の船艀の一つで、切船艀と艀櫓との一座船艀之間に入れるもの。引越・雇船・新造積帳書一、百三十拾匁杉六并甲中木、引こし舟舳。

ひっこしなるまい。ぶるま「引越振舞」一名「引越しに来た人が近隣に金品などをふるまうこと。また、そのもの。」〔笑〕儂之
ひっこしゃ「詞」「ひこしゃ」を強めていう語抵抗するさま。浄瑠璃「行平磯馴松十四是の若旦那計兵衛様」に惚れられても、びっこししゃ跳ね廻り。

〔笑〕儂之
ひっこしりょう「レック（引越料）一名「引越しに要する費用。移転料。」〔笑〕ヒッコシロシロを會之。
ひっこす「引越（日五十四）居所をかえる。移転すること。転居する。ひきこす。人情本・春色梅見養美九二八駒仲の郷から引越（ヒッコスの何だの角だの」と）。正直者「国太目独歩」君は直ぐ私の宅に移転（ヒッコシ）給へ。」〔笑〕儂之
ひっこすく「勤（因置）被、引きぬく。各組から一人ずつひっこすく山梨県南巨摩郡奈良井田五十（ひっこさず）」山形県西置賜郡鮎川（ひこじく）、ひこじいといつて来い愛媛県周桑郡鮎川

ひっこする「引越（他ラ五（四）（ひっ）は接頭語として強くこする。滑稽本浮世風呂二下背中をひっこすってやらうから。」日本橋泉鏡花四六目を引越ヒッコスつて。）②物を持ちだけひっこす。さざっとする。洒落本・蚊不喰呪咄「ひっこす。ひっこすまいになんくらいな。」〔笑〕儂之
ひこたこ「たちゃん」。青森縣三戸郡18 岩手県昭陽城界田 新潟県東蒲原郡45（ひこたこ）青森縣113

13

